Hokkaido University News

北大時報

令和5年
1
No. 826　January 2023

総長年頭挨拶
令和4年度「寳金総長に伝えたい！」を開催
ザンビア大学日本語短期講座の再開を支援

No.826 令和5年

目 次

令和4年度「寳金総長に伝えたい！」を開催

塩野義製薬株式会社に感謝状を贈呈

全学ニュース

1 総長年頭挨拶
3 事務局が「災害等危機対策本部設置訓練」を実施
4 令和4年度「寳金総長に伝えたい！」を開催
5 令和4年度北海道地区大学SD研修「大学職員セミナー」を開催
6 第15回（令和4年度第2回）新渡戸カレッジメンターフォーラムを開催
7 令和4年度現代日本学プログラム課程卒業論文ポスター発表会を開催
8 令和4年度北海道留学生交流推進協議会総会をオンラインにて開催
9 留学生のための「在留資格（ビザ）」無料相談会の開催
9 塩野義製薬株式会社に感謝状を贈呈
10 ワクチン研究開発拠点キックオフシンポジウムを開催
11 サブサハラ・アフリカの協定校向けに短期留学プログラム（HUSTEP）を紹介
12 ザンビア大学日本語短期講座の再開を支援
13 アゼルバイジャンで日本留学フェアを開催
14 寳金総長がベルギー王国ゲント大学と大学間交流協定に署名
14 THE Campus Live Japan 2022に横田理事・副学長が登壇
15 札幌市との包括連携協定を締結
16 「国民との科学・技術対話」支援事業　アカデミックファンタジスタ　函館中部高校、札幌旭丘高校、札幌国際情報高校にて3名の研究者が講義を実施
18 寳金総長がベトナム社会主義共和国・ホーチミン市及びマレーシア・クアラルンプール市を訪問
19 令和4年度第8回　定例記者会見を開催
20 北大フロンティア基金
23 令和4年度　第3回部局・分野横断技術交流会「3Dプリンタを体験してみよう！」を開催
24 2022年度 DEMOLA HOKKAIDO 3rd Batchファイナルデモンストレーションを実施
25 サイエンス・フェスタ2022にてSDGsワークショップ 目指せ！みらい博士 ～明日を創るのは君だ～ 北海道大学×チ・カ・ホを実施
26 第1回北大・地球研連携協定記念シンポジウムをハイブリッドで開催
27 令和4年度第2回サステイナビリティ推進員会議を開催
28 DX博士人材フェローシップ等にて「博士学生のための異分野交流会」を開催

部局ニュース

29 文学院が北海学園大学文学研究科と特別聴講学生に関する協定を締結
29 理学研究院で消防訓練を実施
30 生命科学院がアクティブラーニング形式の「Research Ethics Workshop for IGP students（研究倫理ワークショップ）」を開催
31 第17回医学研究院連携研究センター研究成果発表会をオンライン開催
31 歯学研究院で「動物供養祭」を挙行
32 工学系部局で安全衛生管理講演会を開催
32 低温科学研究所が金沢大学環日本海域環境研究センターと連携協定を締結
33 スラブ・ユーラシア研究センターが冬期国際シンポジウムを開催
34 第2回 北の森林サイエンスCAFE開催
35 苫小牧市と北方生物圏フィールド科学センター苫小牧研究林が包括連携協定を締結
36 和歌山研究林でアートプロジェクト「森のちからXIII」を開催

博士学位記授与　37

研修

40 令和4年度北海道地区国立大学法人等学生支援担当職員SD研修

表敬訪問　41

人事　42

42 新任部局長等紹介
43 新任教授紹介

訃報

44 名誉教授　飯田　誠一　氏

ザンビア大学日本語短期講座の再開を支援

札幌市と包括連携協定を締結

寳金総長がベトナム社会主義共和国・ホーチミン市及びマレーシア・クアラルンプール市を訪問

和歌山研究林でアートプロジェクト「森のちからXIII」を開催

表　紙：総長年頭挨拶（関連記事1頁に記載）

裏表紙：キャンパス風景㉞　北方生物圏フィールド科学センター森林圏ステーション北管理部天塩研究林（天塩郡幌延町字問寒別131）

年頭の挨拶
---「社会と歩む卓越」を目指して---

第20代総長　寶金（ほうきん）　清博（きよひろ）

新年、明けましておめでとうございます。北海道大学の教職員、学生、関係者の皆様には、穏やかで静かな新年を迎え、決意を新たに、それぞれの目標を持っていらっしゃることと思います。少し、お時間をいただき、新年のご挨拶を兼ねて、今年一年の北海道大学の展望について、皆さんと考えてみたいと思います。

『今年は激動の年になる』という言い方は、毎年、使われているように思います。歴代総長の年頭挨拶でも、常に、そうした変革の時期にあることが強調されていました。

確かに、歴代総長が指摘してきたように、大学は、いつも、大きな変化の中にいます。しかし、今、私たちは、これまでとは根本的に異なる二つの大きな転換期の最中にいます。それは、第一に、地球レベルで言えば、私たちが信じて疑うことのなかった制限のない拡大生産がプラネタリー・バウンダリーの危機を背景に行き詰まっていること、第二に、日本の地域のレベルで言えば、地域社会が人口減少と高齢化により縮小し、その多くが消滅の危機にあることという、二つの根源的な危機だと考えています。

昨年一年間を見ても、2月末にロシアによるウクライナ侵攻が起こり、その後の悲惨な戦争状態が現在まで継続し、「核兵器の使用」という想像したくない言葉までが現実味を帯びています。また、すでに3年目を迎えているコロナ禍が、依然として、社会活動を大きく制限し、その行方は未だに楽観を許さない状況です。

昨年2022年ばかりでなく、21世紀になって、drasticな転換は、我々の想像を超えるスピードで深化し、社会を急速に変えつつあります。Digital transformationは社会の在り方、人の働き方、人間関係の基本となるコミュニケーションを根底から変えつつあります。大学での授業は、オンラインから、オンデマンド、そして、一部では、メタバースが使われ始めています。また、サステイナビリティに関しては、厳格な世界基準が急速に構築されつつあり、多くの企業はキャッチアップしていますが、大学に関して言えば、取り残されている大学がほとんどです。

また、地政学的関係においても、米国の一極体制が揺らぎ、ロシアの問題や東アジアにおける緊張関係といった状況が私たちアカデミアにも大きな影響を及ぼしています。学術の世界でも、グローバリゼーションが行き詰まりを見せて、多極的、multilateralな混沌が支配的となり、新しい秩序の形成に向けて動き出しています。

そして、Z世代あるいはミレニアム世代と言われるデジタル ネイティブ、SDGs ネイティブの若い学生や教職員がキャンパスの中心になり始めました。彼らの中には、既存の20世紀的な経済成長至上主義から脱却し、地球からの搾取を拒絶し、いかにして地球と共生し、循環型の社会を目指すかを真剣に考えている人たちがいます。

本学のような基幹総合大学は、教育・研究・社会共創を通して、大きな役割があり、社会からも大きな期待を受けています。その責務は決して小さくありません。

こうした世界の課題解決への貢献をするため、北海道大学は、その創立以来、常に改革と発展を求められてきました。

振り返ると本学は、札幌農学校から帝国大学への移行期における大学存続の危機、太平洋戦争による社会の大きな混乱などを克服してきました。直近では、10兆円の大学ファンドや地域大学振興のためのパッケージが政策決定されており、さらに、大胆な変革が求められています。

この大胆な改革力とレジリエントな経営力について、私たちは、本学の歴史にそのルーツを見ることができます。北海道大学は、明治政府から土地を付与され、それをアセット（資産）として、北海道大学初代総長の佐藤昌介先生などを中心として教職員が様々な経営戦略を駆使して、現在の姿へと指数関数的な発展を遂げてきました。この稀有な設立過程は、学内外の関係者にもあまり認識されていません。

この、私たちが受け継いだ最大の固有のアセットであるLand-grant Universityとしての経営力は、この危機でも大きな力となることは、私たちの先人やその歴史が証明しています。

私たちは、現在、「地球」、「社会」、「個人」の変革を念頭に置き、西暦2030年をターゲットイヤーとした北海道大学のビジョン、HU VISION 2030の策定を行っています。その中では、卓越した世界的研究能力、すなわち

「Excellence」、そして、地域に密着した課題解決のための社会への拡張力すなわち「Extension」、この二つのEXを融合したハイブリッド大学を目指すことを掲げています。短い言葉で、「社会と歩む卓越、Excellence walking with Society」と表現しています。

本年は、ご存じのように、国際卓越研究大学制度が発足し、同時に、地域中核・特色ある研究大学総合振興パッケージが開始されます。さらには、社会的インパクトなどの新しい評価制度が導入され、大学と社会の関係が大きく変化します。その中で、北海道大学は、この二つのEX、ExcellenceとExtensionを同時に発展させ、私たちが先人から受け継いできた遺伝子をさらに発現させ、比類なき独自のプロセスを経て、指定国立大学、そして、国際卓越研究大学を目指すスタートの年とします。その最大の目的は、北海道大学の建学の4つの精神を引き継いで次の世界と日本をリードする子供達、若い学生、リーダーを育てることです。

そのために、いくつかの大胆な取り組みを検討しています。詳細は、今後、機会をみて、ご説明いたします。その一つは、自己資金を大きく増加させるための大学債の運用も含めた財務力の拡大、あるいは、社会から共感が得られるような創基150周年記念事業の展開などが挙げられます。

北海道大学の四季おりおりの景色は美しいと思いますが、とりわけ私は、真冬の古河講堂が大好きです。114年の風雪に耐えてきたその古河講堂から少し目を移すと、白い工事用のフェンスで覆われた建物が見えます。同じく北海道大学最古の建築である旧昆虫学及養蚕学教室や旧昆虫標本室です。今年の秋、この歴史的建造物が「北海道ワイン教育研究センター棟」として生まれ変わります。持続可能な社会を目指す「社会と歩む卓越」北海道大学の象徴として再生し、この秋には、皆様にご披露できる予定です。ぜひご期待ください。

2023年、令和5年は、うさぎ年です。北海道大学は、明治9年、西暦1876年に札幌農学校として設立され、2026年に創基150周年の記念の年を迎えます。新年を迎え、その記念すべき年まで残り3年となり、うさぎのような大きな飛躍 leapの一年にしたいと願っています。

2年前の総長就任時に私は皆様に「北海道大学の再生と発展」を約束させていただきました。皆様の評価は様々かと思いますが、私は、「再生」についてはある程度クリアし、これから、創基150周年に向けて、いよいよ「発展」のステージにステップアップする時期に入ったと思っています。

今年も一年、北海道大学の発展のため、私は、全力で当たる所存です。皆様にも更なるご協力とご尽力をお願いする次第です。

最後になりますが、皆様の今年一年のご健勝をお祈り申し上げて、年頭の挨拶とさせていただきます。

事務局が「災害等危機対策本部設置訓練」を実施

12月23日（金）、事務局2号館2階大会議室において、災害等危機対策本部設置訓練を実施しました。

本訓練は、平時における大会議室のレイアウトから、災害等危機対策本部（以下「対策本部」）へのレイアウト変更、ネットワーク環境の切替等を経験することによって、災害発生時に迅速な対策本部の設置・運営に必要な対応力を身に付けることを目的とし、事務局各課（室）の教職員35名が参加して行われました。

進行役の総務課職員による指示の下、対策本部を構成する各班に分かれ、レイアウト変更、電話設置、ネットワーク環境接続、電話回線及びネットワーク通信テストなどの訓練が行われました。

訓練終了後、災害等危機対策本部総括副本部長である行松理事から、参加者一人一人が、日頃から災害発生時に対する問題意識を持つことが重要である、との講評が行われました。

北海道大学では、今後も防災意識の向上に資する訓練等を継続的に実施します。

（総務企画部総務課）

災害等危機対策本部設置訓練の様子

講評を行う行松理事

令和4年度「寶金総長に伝えたい！」を開催

9月15日（木）及び11月28日（月）、総長と本学に在籍する学生とが直接対話する「寶金総長に伝えたい！」を開催しました。

この取組は、総長と学生が直接対話する機会として、令和2年度より実施しているものです。

9月15日（木）は本学に在籍する学部学生を対象として、事務局大会議室にて、寶金清博総長、山口淳二理事・副学長、髙橋　彩副理事及び各学部の学部学生12名で実施しました。

11月28日（月）は本学に在籍する大学院学生を対象として、附属図書館メディアコートにて、寶金総長、山本文彦理事・副学長、奥本素子オープンエデュケーションセンター准教授及び各学院等の大学院学生10名で実施しました。

和やかな雰囲気の中、10年後の北大の姿について、農場のある景色を残したい、北海道全体の魅力がつまった大学であってほしい、という意見をはじめ、研究分野を超えた学生同士の更なる交流についての提案など、活発な意見交換が長時間にわたって行われ、本学及び参加された学生の双方にとって大変有意義な機会となりました。

本イベントの概要動画は、本学ウェブサイトにて公開予定です。

（学務部学務企画課）

9月18日（木）会場の様子

総長に意見を伝える学生

11月28日（月）実施の様子

集合写真

令和4年度北海道地区大学SD研修「大学職員セミナー」を開催

11月29日（火）・30日（水）の両日、高等教育推進機構情報教育館にて、令和4年度北海道地区大学SD研修「大学職員セミナー」を開催しました。

本研修は、「大学職員のキャリア形成と意識改革」をテーマとして、①職場である大学を、日常業務から少し離れた視点で捉える、②現場で起きているさまざまな問題の背景、改革の方向などについて考える、③他の参加者や講師と議論しながら、今後の課題を探っていくことを目的として、大学院教育推進機構高等教育研修センター、総務企画部人事課及び学務部学務企画課が主催し、大学院教育学研究院の協力により実施しているものです。

大学職員セミナーは、大学職員が、教員とともに大学改革の重要な担い手として、その専門性を高める学習・研修の場として、平成18年度から実施しており、今回が4年ぶり、14回目の開催となります。

今回は本学職員2名を含む、道内の国公私立大学、高等専門学校の職員27名が参加しました。

1日目は、山本文彦理事・副学長による開会の挨拶の後、マーケティング・プランナー　臼井栄三氏を講師に招き、「業務改革のための発想法～アイデアの作り方」をテーマとした講演を行い、引き続いてグループワークを行いました。

2日目は、「コロナ禍を通じて見えてきたもの」をテーマに、北星学園大学　伊藤圭一郎氏、北海道科学大学　川名真紀子氏、北海道医療大学　小林昭博氏、本学工学系事務部情報科学研究院事務課　金久保秀斗氏による事例発表・パネルディスカッションの後、コロナ禍における業務の変化等について、グループに分かれて情報交換を行いました。その後、これからのwithコロナ時代における大学のあり方を見据え、①オンライン授業、②学生のキャンパスライフ、③リモートワーク、④DX・業務改革の4つのテーマから各自がディスカッションしたいものを選び、グループワークを行いました。最後に各グループからの発表を行い、活発な質疑応答が行われ、全日程終了後に、山本堅一高等教育研修センター副センター長から修了証書が授与されました。

1日目の研修終了後に行われた情報交換会では、活発な意見交換と参加者同士の交流が行われ、大いに盛り上がりました。

アンケートでは、今後は業務の本質を理解して取り組みたい、同じ世代の職員と意見交換できて良い刺激となった、他機関の現状や課題を知ることができて参考になった、グループワークで多くの機関の職員と交流を深めることができてよかった等の感想が寄せられました。

（学務部学務企画課）

臼井氏による講演

グループワークの様子

パネルディスカッションの様子

第15回（令和4年度第2回）新渡戸カレッジメンターフォーラムを開催

新渡戸カレッジの大学院教育コースでは、12月17日（土）に高等教育推進機構において、第15回メンターフォーラムを開催しました。

社会の多様な分野で活躍する方々がメンターに就任し、新渡戸カレッジ生のキャリア意識の醸成、社会的視野の広がり、及び人的ネットワークの形成にご協力いただいています。

メンターフォーラムは、新渡戸カレッジ生が大学院修了後のキャリアを念頭に、カレッジ生自身にとって身近なロールモデルであるメンターとの交流を通じ、自身のキャリアパスをより具体的に考える機会として、夏と冬の年2回開催されています。

当日は、第1部として講演会を行い、『キャリアパスを考える』のテーマで、6名のメンターに、ご自身のキャリアや実社会における経験に基づくアドバイス等について英語でご講演いただきました。新渡戸カレッジ生は、多様な分野でグローバルに活躍する先輩たちの話に刺激を受け、熱心に耳を傾けていました。

続く第2部では、新渡戸カレッジ生が各メンターに自由に質問し対話を行う交流会として実施しました。新渡戸カレッジ生は大学における研究活動及び今後本格化する就職活動等について積極的に質問し、アドバイスを得ることができました。

本メンターフォーラムを通して、新渡戸カレッジ生は、大学院生活をどのような姿勢で学修・研究に取り組み、将来のキャリアデザインに繋げていくことができるか等について、貴重な洞察を得ることができたようです。

（学務部教育推進課）

講演会様子（左：藤井メンター、右：集合写真）

交流会におけるメンターとの対話の様子

令和4年度現代日本学プログラム課程卒業論文ポスター発表会を開催

外国人留学生を対象とした4年間の学士課程プログラムである現代日本学プログラム課程（現プロ）の4年生による卒業論文ポスター発表会が、12月22日（木）に学生交流ステーションにて開催されました。

発表会では、今年度末に現プロ第5期卒業生となることを目指す4年生が、卒業論文の内容をポスター報告の形式で発表しました。発表された卒業論文は、英語または日本語で執筆され、日本の地域政策、外交政策、言語学や産業などの様々なテーマについて、外国人留学生ならではの視点から研究を行った成果をまとめたもので、4年間学んできたことの集大成と言えるものです。

発表会には、山口淳二理事・副学長（現代日本学プログラム課程長）、高橋　彩副理事（現代日本学プログラム副課程長）をはじめ、同課程担当教職員、現プロ学生など多数が出席し、各報告者からの興味深い発表に熱心に聞き入っていました。

4年生の多くは、卒業後に国内外の企業への就職や大学院への進学を予定しており、今後の活躍が期待されます。

（学務部教育推進課）

現プロ4年生による卒業論文ポスター発表

令和４年度北海道留学生交流推進協議会総会をオンラインにて開催

12月8日（木）に、令和4年度北海道留学生交流推進協議会総会をWeb会議システム（Cisco Webex）にて開催しました。協議会には、北海道内の大学、短期大学、高等専門学校、地方公共団体、留学生支援団体から51名が参加しました。

はじめに、同協議会運営委員会委員長である山口淳二理事・副学長から「平成元年の協議会発足当初400名だった北海道の留学生は、2019年度には3,800名を超え順調に増加していた。しかし昨今は新型コロナウイルスの感染拡大をうけ留学生数も減少に転じている。留学生支援の在り方を模索しつつ今後、更なる受け入れ増加を目指す中で、益々協力関係を密にして留学生交流を支援していく必要があることから、これらの問題を議論する場として本協議会は大きな意義を持っている。」旨、開会の挨拶がありました。

引き続き、学生相談総合センターアクセシビリティ支援室室長　榊原佐和子准教授による「障害学生支援～大学における合理的配慮とその課題」と題した講演で、留学生を含めた障害学生支援の考え方、合理的配慮の課題について説明がありました。障害のある留学生への支援については課題が少なくない中、留学生支援担当部署が果たすべき役割を考えるとともに支援のスタンスや学内外の連携のあり方を考える良い機会となりました。

各団体からの報告事項等として、札幌国際大学から新型コロナウイルスによる学生への影響に関し、支援内容を含む情報を共有していただきました。また、外国人相談窓口を設けている北海道国際交流・協力総合センター（HIECC）から、留学生を対象としたイベントについての実施報告がありました。

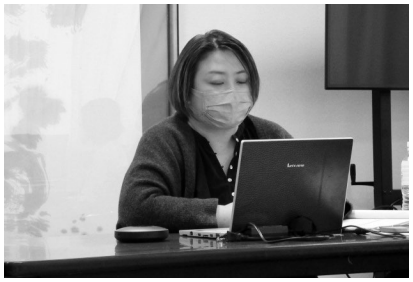
事務局からは、昨年11月現在の北海道内の大学、短期大学、高等専門学校への留学生の在籍状況、留学生向けの奨学金の紹介、各機関による事業、行事等実施状況等について説明が行われました。

協議会を通じて、各受入機関、自治体、国際交流団体が情報交換を行い、各機関・団体において試行錯誤の上、様々な取り組みを実施していることを共有する良い機会となりました。今後も、留学生受入機関と関係団体との協力体制が一層強化されることが期待されます。

（学務部学生支援課）

北海道大学内でのオンラインの様子

山口理事・副学長による開会の挨拶



アクセシビリティ支援室室長
榊原准教授による講演の様子

留学生のための「在留資格（ビザ）」無料相談会の開催

11月25日（金）、北海道行政書士会と北海道大学キャリアセンターが共催で北海道大学の外国人留学生と職員を対象とした、「在留資格（ビザ）」無料相談会を開催し、19名の参加がありました。

この相談会は、例年、外国人留学生から、『内定をもらったが在留資格の変更の仕方が分からない』、『永住権に必要なポイントにこの資格は有効か』、『卒業後も就職活動を続けるにはどのような手続きが必要か』といった相談が多いものの、在留資格に関する手続きは個々の状況によって違うため、プロの行政書士に答えてもらうべく企画、開催に至りました。

相談会の企画・プロモーション・当日の運営は株式会社北海道アルバイト情報社のジョブキタインターナショナルが行い、中国人やミャンマー人のスタッフが、母国語や英語でサポートをしてくれました。

担当する行政書士は二人一組で相談に対応しました。税理士や社会保険労務士等の資格を保有していたり、多言語に対応可能な方々のため、あらゆる角度から外国人留学生や職員へ細やかなアドバイスを行っていました。

相談した外国人留学生はもちろん、行政書士会の方々にも、良い相談会になったというお声をいただき、今後も継続して開催できたらと考えています。

（学務部キャリア支援課）

受付の様子

相談を受ける外国人留学生

塩野義製薬株式会社に感謝状を贈呈

塩野義製薬株式会社は、平成15年に寄附講座を設置して以来、長きにわたり北海道大学と共に創薬研究にとどまらず新たな生命科学分野の開拓に寄与され、平成20年には国立大学法人の敷地内に初となる民間の共同研究施設「シオノギ創薬イノベーションセンター」を開設し、数々の研究成果を生み出すとともに人材育成に大きく貢献いただきました。

この度、令和4年8月1日に同センター（創薬基盤技術研究棟）を寄附いただき、北キャンパス総合研究棟7号館として創成研究機構が管理するオープンラボラトリー施設として運用することとなりました。

この研究棟には同社も協働で参画する「北海道大学ワクチン研究開発拠点」が入居し、最先端の研究を推進します。

これまでの多大なご支援と今後も協働関係を継続していくことについて、12月1日（木）にクラブ関西（大阪市北区）において、寶金清博総長から、同社の手代木功代表取締役会長兼社長に感謝状を贈呈しました。

今後も共に、様々な研究分野において協働し、我が国のみならず世界の課題解決にご尽力いただくことに感謝の意を表します。

（研究推進部研究支援課）

感謝状を手にする、寶金総長（左）と
塩野義製薬株式会社の手代木代表取締役会長兼社長（右）

ワクチン研究開発拠点キックオフシンポジウムを開催

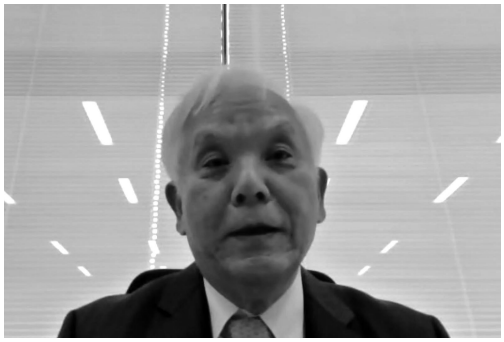
ワクチン研究開発拠点は、12月21日（水）、オンライン形式によるキックオフシンポジウムを開催しました。本シンポジウムは、令和4年度国立研究開発法人日本医療研究開発機構（AMED）「ワクチン開発のための世界トップレベル研究開発拠点の形成事業」に採択されたことに伴い設置された本拠点において、今後何を目指し、どのような研究開発が行われているのかということを広くご理解いただくことを目的として開催されました。

シンポジウムでは、「ワクチン開発のための世界トップレベル研究開発拠点の形成事業」プログラムスーパーバイザー 濵口道成 先生（先進的研究開発戦略センター（SCARDA）センター長）、同プログラムオフィサー 菅野純夫 先生（千葉大学　未来医療教育研究機構　特任教授）、寶金清博総長からご挨拶を頂きました。続いて、澤　洋文拠点長から本拠点の紹介の後、本拠点の研究開発分担者4名、メルボルン大学のKedzierska教授を含む本拠点に参画する研究者8名がワクチン開発研究に資する研究発表を行いました。総勢47名と多くの方にご参加いただき、各研究発表では質疑応答が交わされるなど、充実した内容となりました。

最後に、増田理事・副学長から閉会挨拶が行われ、盛況のうちに終了しました。

（研究推進部研究支援課ワクチン研究開発拠点事務室）

シンポジウムはオンラインにて開催


濵口センター長（SCARDA）による挨拶

寶金総長による挨拶（ビデオ配信）

Kedzierska教授（メルボルン大学）による研究発表

サブサハラ・アフリカの協定校向けに短期留学プログラム（HUSTEP）を紹介

アフリカルサカオフィスは、文部科学省から受託している「日本留学海外拠点連携推進事業（サブサハラ・アフリカ）」の拠点として同地域から優秀な留学生の誘致を行っています。その活動の一環として、11月16日（水）に同地域の協定校の学生及び教職員を対象に、短期留学プログラム（Hokkaido University Short-Term Exchange Program:HUSTEP）を紹介するウェビナーを国際交流課の協力を得て開催しました。

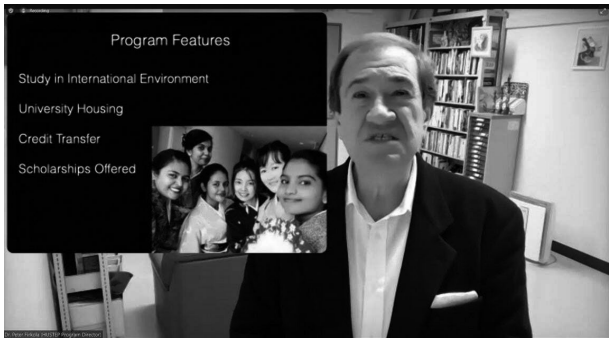
本学は同地域からの留学生数全国1位（独立行政法人日本学生支援機構「令和3年度留学生調査」）を誇り、今後も交流が更に活発化することを期待されています。しかしながら、同地域の学生にとって、日本留学に関する情報は決して多くなく、自分の関心に合致したプログラムを探すことは大変な苦労を伴います。これまで、HUSTEPへの留学経験が、その後本学や日本国内の大学院への進学へ繋がった事例があることから、ひとりでも多くの協定校の学生にHUSTEPを知ってもらうため本ウェビナーを企画しました。

オフィスでは学部・大学院留学を広報するイベントを数多く実施してきましたが、協定校に対するHUSTEPの紹介に特化したウェビナーを実施するのは初めての試みでした。日本とアフリカの学生が共に学んでいる写真を使用したポスターを作成し、協定校を通じた広報活動を行ったほか、同地域出身のHUSTEP経験者からも広報への協力を得ることができました。

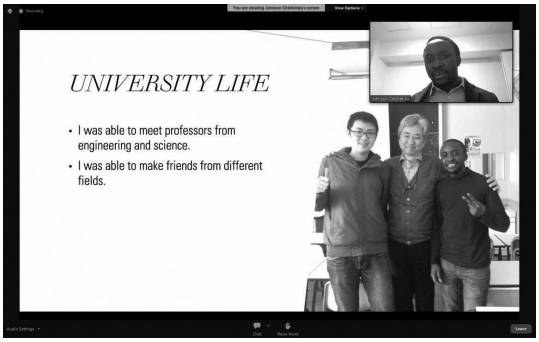
当日はHUSTEP担当教員であるピーター・フィルコラ教授からプログラムの概要説明、申請時の留意点、奨学金に関する概要を説明し、HUSTEP経験者が体験談とキャリア形成について語りました。4か国（ナイジェリア、南アフリカ、ケニア、ザンビア）5大学の協定校から合計162人の参加があり、チャットや音声を通じ活発な質疑応答が行われました。実施後のアンケートでは88%がウェビナーの内容について「満足」あるいは「極めて満足」と回答したほか、「準備をして来年申請したい」と申請に対する意欲をみせるコメントもあり、ウェビナーは潜在的交換留学生の知的好奇心を刺激し、モチベーションを高める効果があったと考えています。

今後も、オフィスにおいてはサブサハラ・アフリカの協定校と密に連絡を取り合い、関係強化を図るとともに、当該地域から優秀な留学生を誘致できるよう、引き続き留学促進の事業を遂行していきます。

（国際部国際連携課）



フィルコラ教授によるプログラム説明



HUSTEP経験者による発表

ザンビア大学日本語短期講座の再開を支援

アフリカルサカオフィスは、文部科学省から受託している「日本留学海外拠点連携推進事業（サブサハラ・アフリカ）」の拠点として同地域から優秀な留学生の誘致を行っています。

活動の一環として、オフィスのあるザンビア大学と日本語短期講座を共催し、運営を支援しています。日本語学習の機会が少ない当地では、講座は留学希望者にとって日本語に触れ、日本の情報を得られる重要な機会のひとつです。日本語短期講座は、平成25年11月に公開講座として開講されましたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により一時休止となっていました。

ザンビアにおけるコロナの状況も一段落した今年、ザンビア大学人文社会学部へ複数の日本の大学から学部留学生4名が到着したのを機に、同大学から日本語短期講座再開の提案があり、講座が再開されることとなりました。講座には、日本留学を見据える学生や日本語を自学していた社会人など、コロナ禍以前の10倍近い登録がありました。コロナ禍で日本の存在が薄れたように思われましたが、日本へ興味を持つ人や潜在的な日本語学習者は存在しており、それが顕在化したのではないかと受け止めています。

再開された講座は、対面とオンラインのクラスを週1回（90分）×10週間、3～6月／8～10月の2回実施され、日本人留学生は学生交流の観点からボランティア講師として関与し、計167名が受講しました。受講者のうち日本留学希望者は本オフィス留学コーディネーターの支援を受け、3名が国費留学生に選定されるに至りました。また、11月に実施した第2回講座の修了式には在ザンビア日本国大使も出席するなど、当地の日本関係者の関心も高く、受講者への事後アンケートでは97.9%が「日本に留学したい」、全員が「日本語の学習を続けたい」と回答し、日本への興味、日本語学習熱の高さが窺われました。

今後も、日本語短期講座の運営管理支援を含む様々な活動を日本への関心向上や留学生誘致へ有効活用し、サブサハラ・アフリカ地域に合わせたアプローチを続けていきたいと考えています。その中でひとりでも多く優秀な留学生を誘致できるよう、引き続き留学促進の事業を遂行していきます。

（国際部国際連携課）

対面授業の様子

修了証授与の様子

アゼルバイジャンで日本留学フェアを開催

ロシアモスクワオフィスでは、12月3日（土）にアゼルバイジャン共和国の首都バクー市において日本留学フェアを開催しました。本フェアは、本学が2018年より文部科学省から受託している「日本留学海外拠点連携推進事業」の一環として、在アゼルバイジャン日本国大使館の協力を得て実施したものです。アゼルバイジャンは親日国として知られており、また、本年は日本との外交関係樹立30周年という記念すべき年であることから、現地では年間を通し各地で日本国大使館による日本関連イベントが開催されており、本フェアは両国の友好年を締めくくるファイナルイベントとして実施されました。新型コロナウイルス感染症の世界的流行以来、本事業においては初めての対面式の日本留学フェアとなりましたが、現地には本学の他、筑波大学及び日本学生支援機構が出展し、156名の来場者がありました。

フェアは、日本留学概要やMEXT奨学金についての説明、出展大学によるプレゼンテーション、日本留学経験者の体験談等から成る全体セッションと、本事業の留学コーディネーターや出展・協力機関スタッフによる個別相談セッションの2部構成で行われました。対面式の相談会の他にも、日本の大学や日本語学校から提供されたビデオの上映や各種パンフレットの配付、日本発のオンライン国際教育プラットフォームであるJV-Campusの紹介、北海道庁の観光PR等を行いました。また、「日本と日本語」に関するミニレクチャーも開講し、参加者にとって日本への興味が一層湧くような情報提供・相互交流の場となりました。

アゼルバイジャンでは、次世代を担う高度人材育成を目的とし、現地政府による優秀な若者の海外名門大学への派遣が予定されており、日本をはじめとした海外への留学に対する注目が高まっています。本フェアにおいても学生のみならず多くの保護者が訪れたほか、親子連れでの来場も見られ、みな熱心に出展スタッフの話に耳を傾けていました。アゼルバイジャン側へ有益な日本留学情報を届けることはもちろん、本フェアを通じて得た現地情報を日本側へ共有するなど、今後もアゼルバイジャンからの留学生増加及び相互交流への発展へとつながる取組を続けていきます。

（国際部国際連携課）

加藤博文ロシアモスクワオフィス所長からのビデオメッセージ

北海道大学のプレゼンテーション

日本留学経験者による体験談

日本大使館による相談ブース

寶金総長がベルギー王国ゲント大学と大学間交流協定に署名

12月5日（月）、ベルギー王国のゲント大学との大学間交流協定及び学生交流に関する覚書への署名をホテルオークラ東京にて行いました。署名式は、ベルギー王国アストリッド王女殿下が率いるベルギー経済ミッション（Belgian Economic Mission）の来日に合わせて行われたもので、ゲント大学からはRik Van de Walle学長が来日、本学からは寶金清博総長が出席しました。

ゲント大学は1817年に創立されたベルギー国内で最高水準の大学の1つで、文系・理系合わせて11の研究院・学部と、5万人の学生、1万5千人の教職員を有する総合大学です。

当日は、アストリッド王女殿下、ハジャ・ラビブ外務・欧州問題・対外貿易・連邦文化施設相他来賓の立会いのもと、両学長が協定書に署名を行いました。本協定をもとに、今後も両大学間の研究・教育分野における継続的な交流が期待されます。

（国際部国際連携課）

協定書への署名の様子

署名後に握手する寶金総長と
ゲント大学 Rik Van de Walle学長

THE Campus Live Japan 2022に横田理事・副学長が登壇

12月13日（火）～14日（水）の2日間に渡り、慶應義塾大学三田キャンパスにて、THE Campus Live Japan 2022が、「ポスト・コロナ時代の日本の大学～課題と展望～」のテーマのもと開催され、横田　篤理事・副学長（国際、SDGs担当）が1日目のセッションに登壇しました。

THE Campus Liveは、Times Higher Education（THE）のイベント・シリーズの1つで、特定の地域や国の大学セクターが抱える課題に焦点を当て、大学関係者が課題解決のためのアイディアや知見を共有し議論することを目的に開催しており、2022年はオーストラリア、アメリカ、英国、シンガポールに続き、今回日本で開催されました。

当日は、フィル・ベイティTHE最高知識責任者、伊藤公平慶應義塾長の開会挨拶、ジュリア・ロングボトム駐日英国大使館特命全権大使、ジョージ・フリーマン英国科学・研究・イノベーション担当大臣による特別講演、ジョー・ジョンソン ハーバードケネディスクールシニアフェローの基調講演、ピーター・マティソン エジンバラ大学学長の講演により、イベントが始まりました。

セッション「SDGsやグローバルな課題に取り組んでいくための大学戦略」では、マシュー・ノウルズ ブリティッシュ・カウンシル駐日代表をモデレーターとし、ベイティ氏、狩野光伸岡山大学副理事とともに、本学から横田理事・副学長が登壇しました。

ベイティ氏によるTHE インパクトランキングの紹介等の後、狩野副理事、横田理事・副学長が各大学のSDGsに関連する取り組みを紹介しました。横田理事・副学長からは、本学は創立以降サステイナビリティ、SDGsという概念が既にその活動に組み込まれている歴史、教職員がそれぞれの活動とSDGsの繋がりを認識することによる一体感、学外の様々なステークホルダーとの連携、また外部からの投資を呼び込むための準備の重要性などについて発表しました。その後、パネルディスカッションと質疑応答で、SDGs実現へのハードルや、教員・学生のモチベーションなどについて活発な意見交換が行われ、参加者のSDGsへの関心の高さを伺うことができました。

（参考）
THE Campus Live Japan:
https://www.timeshighered-events.com/live-japan-2022

（国際部国際連携課）

横田理事・副学長による発表

パネルディスカッションの様子

札幌市との包括連携協定を締結

本学は、12月21日（水）に、札幌市との包括連携協定を締結しました。

同日、学術交流会館で行われた協定締結式及び記念講演会には、札幌市から秋元克広市長、町田隆敏副市長が、本学から寳金清博総長、行松泰弘理事が出席しました。

本協定は、北海道大学が有する知見や人材と札幌市によるまちづくりが連携することにより、相互に協力・発展しながら、地域課題や社会課題の解決に寄与していくことを目的として結ばれました。連携・協働して取り組む事項は、①産学官連携による経済活性化に関する事項、②人材の育成及び地元定着に関する事項、③大学の知見及びまちづくりの連携による付加価値の創造に関する事項、④その他必要と認められる事項です。

締結式では、秋元市長と寳金総長から挨拶と抱負が述べられ、参加した記者からは、人事交流や人材育成、学生の地元定着に関する取組などについて、多くの質問が寄せられました。

締結式に引き続き行われた記念講演会は、会場参加とZoomによるオンライン参加の併用により開催され、本学教職員の外、多くの市民も参加しました。記念講演は、町田副市長から「札幌市のまちづくりについて」、金子純一産学・地域協働推進機構副機構長から「スタートアップエコシステムの構築に向けた大学・高専の取り組み」、松島理明北海道大学病院臨床遺伝子診療部副部長から「遺伝子の情報を利用する医療の進歩について」のテーマで行われ、まちづくり、スタートアップ支援、医療の観点から本学と札幌市の連携の実績や今後の展望に関して説明がありました。その後、寳金総長と秋元市長による対談が行われ、記念講演の内容の振り返りとともに、これから連携を進めたい分野や取組みについて、多岐に亘って活発な意見交換が行われました。記念講演会は予定の時間を少し超過し、盛況のうちに終了しました。

（社会共創部社会連携課）

協定書を掲げる寳金総長と秋元市長

金子副機構長による講演

松島副部長による講演

寳金総長と秋元市長による対談

「国民との科学・技術対話」支援事業　アカデミックファンタジスタ
函館中部高校、札幌旭丘高校、札幌国際情報高校にて3名の研究者が講義を実施

「養殖魚の身体計測：水中で行うカメラ計測」　水産科学研究院　准教授　米山和良

魚体の計測を学習させたAIに、養殖魚の出荷時期を見極めさせれば、適切に管理が出来るようになると話す米山准教授。AIに使用される深層学習やステレオカメラを用いた魚体の計測方法について生徒たちへ説明しました。その後のアクティビティでは、実際に生徒がソフトを使ってデモ画像の魚体の計測を行った後、一連の作業をAIが代わりにできるようになったことを説明し、生徒たちに研究の楽しさを伝えました。

ステレオカメラの画像を確認するタブレットを手に生徒たちへ解説する米山准教授

日　　時：2022年11月7日（月）14：25－15：15、15：30－16：30
会　　場：函館中部高等学校
参加生徒：1年生 約200名、アクティビティ約20名

「折り紙の最先端技術の紹介と可能性」　高等教育推進機構　特任准教授　繁富（栗林）香織

札幌旭丘高校で10、2年生に向けて実施された「学問研究会」で講義を行った繁富先生。自身の海外留学へ行くことになったきっかけや留学先での生活を紹介し、日々の生活の中での発見や気付きが、研究に繋がると生徒たちへ話しました。また、現在取り組んでいる折り紙技術の医療分野への応用研究や、その技術をもとに起業したことなどを紹介しました。

折り紙工学の可能性について話す繁富特任准教授

日　　時：2022年11月8日（火）13：15－14：25、14：45－15：55
会　　場：札幌旭丘高等学校
参加生徒：1、2年生 各講義25名程

「新薬開発で動物も病気から救える時代に」　獣医学研究院　教授　今内　覚

免疫学の分野で動物の医薬品やワクチンの開発を続ける今内教授は、がん細胞に対して免疫細胞が機能しなくなる免疫抑制について説明しました。悪性黒色腫（皮膚がん）になった患者（飼い犬）に、今内教授が開発中の免疫チェックポイント阻害薬を投与したところ、活性化した細胞が、がん細胞を攻撃して患者の腫瘍が小さくなった事例を紹介しました。臨床研究で免疫療法を続け、新薬の効果を証明してきた今内教授は、折れない心を持ち、好きなことを出来るように夢に向かって頑張ってほしいと、生徒たちへエールを送りました。

生徒たちへ免疫チェックポイント阻害薬の解説をする今内教授

日　　時：2022年11月9日（水）13：20～14：05、14：20～15：05
会　　場：札幌国際情報高等学校
参加生徒：2年生 各講義25名

アカデミックファンタジスタとは？

北海道大学の研究者が知の最前線を出張講義や現場体験を通して高校生などに伝える事業、「アカデミックファンタジスタ（Academic Fantasista）」。内閣府が推進する「国民との科学・技術対話」の一環として、北海道新聞社の協力のもと2012年から継続的に実施しています。今年度はコロナ対策を十分に行って、札幌近郊の高校等を対象に22名の教員が講義を実施しています。

北大の研究を発信するウェブマガジン「リサーチタイムズ」や、Facebookでも講義レポート等を随時更新中です。こちらもぜひご覧ください。

・リサーチタイムズ
https://www.hokudai.ac.jp/researchtimes/academic-fantasista/

・Facebook
@Hokkaido.univ.taiwa

（社会共創部広報課）

リサーチタイムズ

フェイスブック

寳金総長がベトナム社会主義共和国・ホーチミン市及びマレーシア・クアラルンプール市を訪問

12月6日（火）に寳金清博総長他4名がベトナム社会主義共和国・ホーチミン市にある大学間交流協定校のベトナム国家大学ホーチミン市工科大学を訪問し、Dr. Mai Thanh Phong学長と面談しました。双方の大学の概略をプレゼン後、両大学間の協力関係を一層強化していくことが合意されました。その後、本学一行は応用化学部、土木工学部の建物を訪れ、教員・学生との懇談、施設見学を行いました。

また、同日に寳金総長他4名がベトナム南部同窓会の設立に向けた会合に出席しました。会合の前には寳金総長から12月1日付で北海道大学アンバサダーに委嘱したDr. Bui Huu Phu（情報科学院修了）へ委嘱状を手交しました。会合では同窓生約15名に対し、本学の概略、近況をプレゼン後、参加者との意見交換が行われ、ベトナムにおける北海道大学の知名度は必ずしも高くなく、それを高める努力が必要、海外（タイ王国・シンガポール共和国）の大学のようにベトナムでマスター・プログラムを提供してはどうか、など、本学の一層の飛躍を期待する様々なコメントがありました。近く、ベトナム出身の元留学生による同窓会が正式に発足する予定です。

12月7日（水）に本学一行はマレーシア・クアラルンプール市に移動し、「日本留学促進シンポジウム」を開催しました。シンポジウムでは、日本留学から帰国後に大学・産業界で活躍している5人の方々（本学OB2名を含む）に登壇・講演いただき、その後パネルディスカッションを実施しました。本学の取組紹介のほか、日本留学のメリットや留学のための資金確保に関する体験などが共有されました。本シンポジウムは、在マレーシア日本国大使館の公使にも臨席いただき、対面で約30名、オンラインで13名の参加者がありました。

シンポジウム終了後にハイティー（軽食パーティー）による懇談会を開催し、その冒頭に寳金総長から12月1日付で北海道大学アンバサダーを委嘱したマレーシア北大エルム会会長の末廣周氏（経済学部卒業）へ委嘱状を手交しました。

懇談会終了後にはマレーシア出身の元留学生との会合に参加し、同窓会設立について手続きする旨が会長就任予定のDr. Lulie Melling（農学院修了）から寳金総長に対して説明がありました。

今回、2名に北海道大学アンバサダーが委嘱され、2ヵ国において同窓会が設立されることになり、本学と東南アジア地域における各種交流の活性化が今後ますます期待されます。

（社会共創部広報課）

寳金総長（右）とベトナム国家大学ホーチミン市工科大学長のDr. Mai Thanh Phong（左）

ベトナム南部同窓会設立会合の集合写真

マレーシア・クアラルンプールにて開催した日本留学促進シンポジウムでの様子

寳金総長（前列左）とマレーシア出身の元留学生

令和4年度第8回　定例記者会見を開催

12月15日（木）、本学の特色ある教育研究活動や運営状況等を社会に向けてわかりやすく発信することを目的とした「定例記者会見」を開催しました。黒岩麻里総長補佐の進行のもと、低温科学研究所の大島慶一郎教授が発表し、北海道教育庁記者クラブ加盟社等から4名の参加がありました。発表内容は以下の通りです。

（社会共創部広報課）

発表事項（発表者）

・海洋大循環を駆動する南極低層水に迫る（低温科学研究所　教授　大島慶一郎）
※発表資料掲載URL
https://www.hokudai.ac.jp/introduction/gov/office/pr/press-conference/R4.html

定例記者会見の様子

発表を行う大島教授

記者からの質問に答える大島教授

黒岩総長補佐と大島教授

北大フロンティア基金

北大フロンティア基金は、本学の創基130年を機に、教育研究の一層の充実を図り、これまで以上に自主性・自立性を発揮して大学としての使命を果たすため、平成18年10月に創設しました。

奨学金制度の充実や留学生への支援などの学生支援を中心に、研究支援、学部等支援など様々な事業を行っており、期限を付さない、息の長い募金活動をすることとしています。

皆様には基金の趣旨にご賛同いただき、ご協力をお願いします。

北大フロンティア基金情報
基金累計額（11月30日現在）　35,584件　6,168,712,427円

11月のご寄附状況

法人等31社、個人207名の方々から37,608,772円のご寄附を賜りました。

そのご厚志に対しまして感謝を申し上げますとともに、同意をいただいている方々のご芳名、銘板の掲示について掲載させていただきます。（五十音別・敬称略）

寄附者ご芳名（法人等）

旭川赤十字病院、株式会社アミノアップ、株式会社ACIL、株式会社大野冷機、医療法人社団かなもり歯科医院、株式会社クボタ、株式会社札幌病理検査センター、一般財団法人札幌陸上競技協会、株式会社シクル、すずらん歯科医院、ダイワ工業株式会社、武ダホールディングス株式会社、町立上ノ国診療所、築地魚市場株式会社、東光電気工事株式会社北海道支社、株式会社TOCREATEIT、株式会社トーホーエンジニアリング、株式会社NIKI Hillsヴィレッジ、日本中央競馬会、医療法人社団　ふるや内科、株式会社北洋銀行、独立行政法人労働者健康安全機構　北海道中央労災病院、峰村内科クリニック、株式会社メディコ北海道、もち処一久大福堂、株式会社ライフアカデミア

寄附者ご芳名（個　人）

合川　正幸	青井　良平	青木　俊介	秋山也寸史	朝倉　賢	阿部　雅史	荒井　克俊	安藤　直哉
井口　光雄	石井　哲夫	石垣　隆弘	石田　典輝	石山　喬	市川　佳代	市坂　有基	伊藤　大貴
伊藤　雄三	稲井　宏博	猪股　路子	井原　博	入澤　秀次	岩井　隆明	岩口　佳史	植松　宏志
内村　慎	内村知榮子	内山多賀子	梅本　由佳	榎本　博	縁記　和也	遠藤　公憲	大石　博昭
大竹　敏則	太田　正敏	大原　正範	岡本　卓也	沖崎　遼	奥谷　圭介	小田原一史	小原　大和
蠣崎　広信	角田　敏男	加地　浩	加藤　伸康	加藤　裕貴	金川　眞行	河本　充司	北村　均
衣川　暢子	木村　成二	木村　暢夫	木村　雅一	木村　祐介	桑澤　嘉英	工藤　敏之	久野　智子
倉田　博司	上月　浩	小林　賢人	齋藤　健一	齊藤　晋	齋藤　久	坂本　大介	桜田　通雄
笹岡　容子	佐藤　弘次	佐藤　修二	佐藤　博昭	三升畑元基	汐川　雄一	志済　聡子	島倉　良成
下村　守	白尾　誠二	白子　由紀	新宮　康栄	菅沼　宏之	菅原　新也	杉江　和男	杉本　聡
鈴木　貴之	関　裕之	瀬名波栄潤	高木　正和	高瀬登志彦	髙橋　順子	高柳　涼	田淵　卓夫
土屋　和子	土家　琢磨	堤　行彦	鶴田　敏郎	寺澤　睦	富澤俊太郎	富所　祐介	富山　睦浩
豊田　威信	仲世古善樹	中村　和正	永森　久善	西田　実弘	西谷内力世	芳賀　純一	羽柴　義博
長谷川就一	花田　秀一	平瀬　隆弘	福士　幸治	福田　直也	福田　正晴	福永　悟郎	藤川　恵子
逸見　勝亮	本宿　洋介	前田　博	松井　耕二	松田　益義	松原　謙一	松本　嶺	間山　一典
光増　安弘	南田　大朗	宮田　信幸	宮本　真	村上　泰一	村瀬徳啓充	村瀬　亮太	森　富士子
矢嶋　剛	山田　澤明	山田　思郎	山本志津子	山本　文彦	山本　睦	横田　篤	横山　考
吉田　広志	陸　邵俊	若狭　哲	渡辺明日香	渡部　克将			

銘板の掲示　20万円以上のご寄附で新規に銘板を掲示される方

（個　人）

稲井　宏博、内村　　慎、内村知榮子、榎本　　博、角田　敏男、齋藤　健一、汐川　雄一、仲世古善樹、永森　久善、芳賀　純一、藤川　恵子、光増　安弘、山本　文彦

（法　人）

株式会社大野冷機、武ダホールディングス株式会社、築地魚市場株式会社、株式会社NIKI Hillsヴィレッジ

〈感謝状の贈呈〉

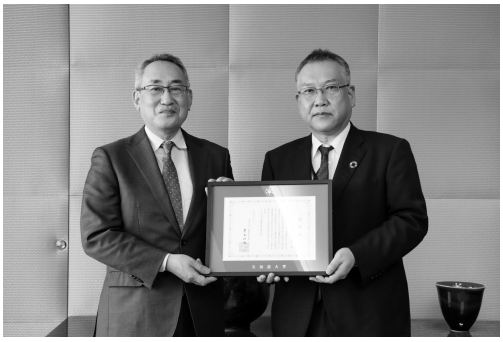
株式会社クボタ　様（令和4年12月2日）

中村　和正　様（令和4年12月5日）

米田　穣　様（令和4年12月16日）

株式会社アミノアップ　様（令和4年12月21日）

本間　　隆　様（令和4年12月22日）



株式会社北洋銀行　様（令和4年12月23日）

石山　喬　様（令和4年12月23日）

ご寄附のお申し込み方法

北大フロンティア基金ホームページの「教職員の方によるご寄附について」にアクセスしてください。
https://www.hokudai.ac.jp/fund/howto-staff.html

①給与からの引き落とし
ホームページから「北大フロンティア基金申込書（兼・給与口座からの引落依頼書）」をダウンロードし、ご記入の上、卒業生・基金室基金事務担当に提出してください。

②郵便局または銀行への振り込み
卒業生・基金室基金事務担当にご連絡ください。払込取扱票をお送りします。

③現金でのご寄附
寄附申込書に現金を添えて、卒業生・基金室基金事務担当にご持参ください。
申込書は、ホームページから「北大フロンティア基金申込書（教職員現金用）」をダウンロードしてご記入いただくか、卒業生・基金室基金事務担当にもご用意していますので、お越しいただいてからご記入いただくことも可能です。

④クレジットカード決済・コンビニ決済でのご寄附
北大フロンティア基金ホームページ
（https://www.hokudai.ac.jp/cgi-bin/fund/bin/xRegist.cgi）の寄附申し込みフォームから申込をお願いします。

北大フロンティア基金に関する問い合わせ　卒業生・基金室基金事務担当（事務局・学内電話　2017）

（社会共創部広報課）

令和4年度 第3回部局・分野横断技術交流会「3Dプリンタを体験してみよう！」を開催

11月29日（火）、30日（水）に電子科学研究所1階セミナー室において部局・分野横断技術交流会「3Dプリンタを体験してみよう！」を開催しました。

本技術交流会は技術職員が自ら企画、運営、講義を行い、スキルの継承・伝達・強化を図り、また異分野の技術職員と技術を通して交流することで、技術職員の全学的な人材交流・技術情報交流・技術強化図ることを目的とした北大コアファシリティ構想研究支援人材育成プログラム、マルチスキル人材育成プロジェクトの事業として行われました。

講習では、コーディネーターが日本人の発明から始まった3Dプリンタの開発の歴史や代表的な出力方法である光造形法、熱溶融樹脂堆積法などについて説明したのち、熱溶融樹脂堆積法を用いた3Dプリンタを使用して実習を行いました。

コーディネーターの指導のもと、受講者が二人一組となって3Dプリンタを自らの手で組み立てて出力先である台座を調整しました。グローバルファシリティセンターのマスコットの3Dデータを3Dプリンタ本体にダウンロードして出力される様子を観察しました。

次に3DCADソフトウエアを使用して3Dデータ作製方法を学びました。実際に名札を出力する3Dデータを受講者各自が作製して名札の出力を行いました。初めて3Dプリンタや3DCADに接する人が多かったにもかかわらず、目標の出力まで達成することができました。

今回は札幌キャンパス以外の技術職員を含めて募集を行いました。和歌山研究林と余市果樹園から各1名、札幌キャンパス11名の全13名で本技術交流会が開催されました。参加者多数のため、2日間に分けて同じ講習内容で行われました。受講者からは、3Dプリンタの利用法について、今では入手できなくなった古い装置の部品を作って修理・改良することができるかもしれない、研究支援で測定している分子構造を可視化・実体化できるツールとして有用である、測定器で定量測定を行うための治具を自らの手で開発できる等、日々の技術支援業務と結びついた感想が寄せられ、今回の講習が今後の業務改善のヒントとなる可能性が感じられました。

札幌、和歌山、余市と職場間の距離を超えて形成された技術職員の輪は、今後の業務に活かされていくことと思います。また、コーディネーターからも、試行錯誤しながら事前に準備したことは、何事にも代えがたい貴重な経験になったという感想が聞かれ、本事業の目的に寄与できました。

コーディネーター：
電子科学研究所　遠藤礼暁
アイソトープ総合センター　阿保憲史

（技術支援本部）

3Dプリンタの説明を受けている参加者

3Dプリンタの組み立てと調整をしている風景

3Dプリンタの出力を観察している風景

2022年度 DEMOLA HOKKAIDO 3rd Batch ファイナルデモンストレーションを実施

12月3日（土）2022年度のDEMOLA HOKKAIDO最終回 3rd Batchの最終発表の場であるファイナルデモンストレーションを開催しました。ファイナルデモンストレーションでは、新型コロナウィルス感染予防対策を行い、北海道大学フード＆メディカルイノベーション国際拠点の会場と、オンラインとのハイブリッド形式とで実施しました。今回も北海道大学の学生だけではなく、東京大学、大阪大学、立命館大学、名古屋市立大学、大阪公立大学、公立はこだて未来大学、小樽商科大学、札幌大谷大学など様々な地域の学生が参加しました。遠方からは、時差にも負けずノルウェーに留学中の学生も参加してくれました。

プログラムには、菅原精機株式会社、株式会社ラック、戸田建設株式会社、株式会社城南進学研究社、北海道大学水産学部の計5団体からご参加いただきました。ケース課題も地域活性化、教育、起業、技術循環、ジェンダー問題と、幅広いジャンルから出題されました。発表の締めを飾った北海道大学水産学部チームの発表では、函館をスタートアップの聖地にすべく、企業・大学・学生を巻き込んだアイデアが報告されました。会場にいた全員が自分ごととして考えられる内容だったこともあり、質疑応答では盛んな議論が行われました。

DEMOLAはフィンランド発の産官学連携イノベーション創出プラットフォームであり、世界16ヵ国、60大学以上が参加している国際的な企業課題解決ネットワークです。学生と企業担当者が一緒にチームを組み、企業のリアルな課題解決に取組むのが特徴です。

2018年から日本では初めて、北海道大学が導入し、約5年をかけて38社42課題に取り組む活動を展開しており、北海道大学をはじめ遠方他大学所属の学生や海外在住の学生の参加が実現しています。

DEMOLAでは、参加企業を随時募集しております。次回の学生の参加者募集は2023年2月下旬～3月下旬を予定しております。

詳細に関しましては、産学地域協働推進機構ＤＥＭＯＬＡ事務局（demola@mcip.hokudai.ac.jp）までお問い合わせください。

（産学・地域協働推進機構）

ファイナルデモンストレーションの様子

サイエンス・フェスタ2022にてSDGsワークショップ 目指せ！みらい博士 ～明日を創るのは君だ～ 北海道大学×チ・カ・ホを実施

産学・地域協働推進機構では、12月17日（土）～18日（日）に札幌駅前通地下歩行空間にて開催されたサイエンス・フェスタ2022において、SDGsをテーマとしたワークショップ「目指せみらい博士！～明日を創るのは君だ～」を開催しました。

本ワークショップでは、地球資源について学べるカードゲームを活用し、子供たちには資源の重要さを体感していただきました。年少の子供にはやや難しいゲームでしたが、8名の北大生のサポートの下で、楽しそうにワークショップに取り組んでいました。

5歳から14歳までの30名を超える子供たちが参加し、開催当日に飛び入り参加の希望が寄せられるなど大変な盛況ぶりで、参加者である子供たちやその保護者からはご好評をいただきました。子供からは「SDGsの活動が身近なところにあるとわかった」「みんなと協力して暮らした方が自分もいい暮らしができると思った」「資源の大切さがわかった」という声が多く、保護者からは「子供が楽しそうに新しいことを学べていてよかった」「大学生インストラクターの対応がとても素晴らしかった」という感想を頂きました。参加後アンケートでは子供、保護者ともに満足度が高く、「機会があればまた参加したい」という感想が数多く寄せられました。

詳細に関しましては、産学地域協働推進機構ＤＥＭＯＬＡ事務局（demola@mcip.hokudai.ac.jp）までお問い合わせください。

（産学・地域協働推進機構）

会場の様子

説明をする大学生インストラクター

みんなで相談して考える様子

考えながらゲームをする様子

第１回北大・地球研連携協定記念シンポジウムをハイブリッドで開催

11月25日（金）、百年記念会館大会議室及びオンラインにて、第1回北大・地球研連携協定記念シンポジウムを開催しました。本シンポジウムは、4月に本学と総合地球環境学研究所（地球研）の連携協定が締結されたことから、今後協働してどのような地域・世界の未来社会のデザインを描くことができるか議論することを目的として開催されました。

諸地域が抱える課題から地球規模の課題に至るまで、多角的な視点から環境問題とその課題解決に向けた取組について講演が行われた後、パネルディスカッションでは、総合知を創出し、戦略的に活用する今後の連携について活発な議論が交わされました。

本シンポジウムはZoomウェビナーにより配信され、後日アーカイブを北大公式YouTubeで公開する予定です。

（サステイナビリティ推進機構）

第1部　挨拶・基調講演

挨拶：寶金清博　総長、山極壽一　地球研所長

基調講演

「北大発展の歴史とSDGs」　横田　篤　理事・副学長

「大学共同利用機関･地球研の共同研究と北大との連携」　谷口真人　地球研副所長

第2部　北大・地球研の研究紹介

2.1 地域課題の解決から地球環境問題にアプローチする

「地域と子どもで創る未来のサニテーション」　山内太郎　環境健康科学研究教育センター長、保健科学研究院教授

「Recognizing local knowledge and histories in contested forest systems towards transforming global environmental injustices」

WONG, Grace Mun Yee　地球研准教授、Stockholm Resilience Centre, Stockholm University

コメンテーター：松田素二　地球研プログラムディレクター

2.2 地球スケールから見る多様な地域社会

「地球温暖化のホットスポット：北極域の課題解決に向けて」　大塚夏彦　北極域研究センター副センター長

「Too muchとtoo littleを解消した持続可能な窒素利用を目指して」

林健太郎　地球研教授、農業・食品産業技術総合研究機構 主席研究員

コメンテーター：山中康裕　地球環境科学研究院教授

第3部　パネルディスカッション

モデレーター：山内教授

パネリスト：寶金総長、山極所長、横田理事・副学長、谷口副所長

挨拶をする寶金総長

挨拶をする山極所長

パネルディスカッションの様子

集合写真（シンポジウム登壇者等）

令和4年度第2回サステイナビリティ推進員会議を開催

サステイナビリティ推進機構は、12月22日（木）、令和4年度第2回サステイナビリティ推進員会議をオンラインで開催しました。各部局のサステイナビリティ推進員及び同補佐の他、施設部職員等合わせて80名の出席がありました。

SDGs事業推進本部長の横田　篤理事・副学長より開会の挨拶の後、事務よりサステイナビリティ推進員制度について説明を行いました。続いて協力要請として、令和4年度冬季の省エネルギー対策及び省エネアンケートの結果について報告を行い、ホームページ*による電力の使用状況グラフを活用していただくよう案内がありました。

次にSDGs事業推進本部の加藤　悟教授より「北海道大学×SDGsへの情報提供について」依頼**を行いました。また、報告事項としてサステイナブルキャンパスマネジメント本部の平　裕特任助教よりサステイナブルキャンパス評価システム（ASSC／アスク）の令和3年度の結果及び来年度以降の運用について報告を行いました。プラチナ認証相当の結果等を踏まえ、今後は3年ごとに実施するとし、次回は令和6年度に行うとした説明がありました。その後、事務より「カーボンニュートラル戦略プロジェクトチームの設置」について説明がありました。

最後に、省エネパトロールの実施やSDGs関連の情報提供、及び省エネ活動に関して、意見交換を行いました。主な議題は下記のとおりです。

サステイナビリティ推進機構では、今後も引き続き、部局等と連携を図りながらサステイナビリティ推進に関する活動を実施して参ります。

これらの活動はキャンパスの維持・管理や財政等に密接に関わる課題でもあり、北海道大学として持続していくためにも全学で一丸となって進めていきたいと考えます。皆様のご理解・ご協力の程、よろしくお願いします。

*https://zengakudenryoku.osc.hokudai.ac.jp/denryoku/

**「北海道大学×SDGs」ニュース掲載依頼フォーム
https://forms.gle/wEZP36MS1nGJ1MkD9

（サステイナビリティ推進機構）

発表事項（発表者）

1. サステイナビリティ推進員制度について

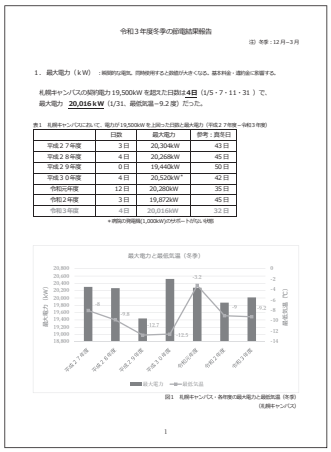
協力要請

2. 令和4年度冬季の省エネルギー対策及び省エネアンケートの結果について
3. 北海道大学×SDGsへの情報提供について（依頼）

報告

4. サステイナブルキャンパス評価システム（ASSC／アスク）令和3年度の結果及び来年度以降の運用について
5. カーボンニュートラル戦略PTの設置について

省エネルギー対策の手引き 2018***



令和3年度冬季の節電結果報告

***https://www.facility.hokudai.ac.jp/wp-content/uploads/2018/07/2018.07-syoene-tebiki.pdf

参加者撮影（一部抜粋）

DX博士人材フェローシップ等にて「博士学生のための異分野交流会」を開催

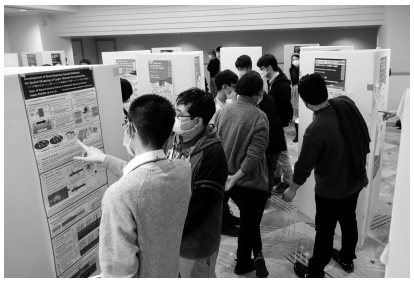
本学DX博士人材フェローシップ、アンビシャス博士人材フェローシップは、東京外国語大学の多文化共生イノベーション研究育成フェローシップ（MIRAI）と共催で12月10日（土）・11日（日）に「博士学生のための異分野交流会」を開催しました。

博士学生に対して文理の垣根を越えた異分野交流の場を提供し、自分の研究を他の人に伝える力を鍛えることを目的として1泊2日の合宿形式で行われた交流会には、本学DXフェローシップ、アンビシャス博士人材フェローシップ等の博士学生25名、東京外国語大学MIRAI博士学生5名、特別講演会講師3名、企画・運営を担当する実行委員（創成研究機構 L-Stationアンビシャス特別助教他）、本学及び東京外国語大学の教職員11名が参加しました。初日の特別講演会では、エア・ウォーター株式会社の阿保洋一氏、Letara株式会社代表取締役／本学工学研究院特任助教のランドン ケンプス氏、本学科学技術コミュニケーション教育研究部門（CoSTEP）特任助教の大内田美沙紀氏が、企業やアカデミア領域でのキャリアパスや、これまでのキャリアの中で経験した DXや異分野交流に関して講演しました。続くポスターセッションでは、博士学生が研究内容を発表し合いました。2日目は「DX時代の博士学生の未来」をテーマにワークショップを実施、終始賑やかに意見交換が行われました。参加者は、対面で議論を交えることで互いの研究に対する理解を深め、分野ごとの表現方法の相違点などの気づきを得た様子でした。

博士学生は日々、研究室や学会などで専門分野について議論を深めていますが、専門分野をどのように活かすか、異分野領域の研究者や一般市民とどのようにコミュニケーション（アウトリーチ）すればよいのか、Society5.0に向けたDXとどのように関わるか、といった点について考える機会は稀です。DX博士人材フェローシップ及びアンビシャス博士人材フェローシップでは、今後も文理の垣根を越えた異分野交流等を通して、キャリアパスを考え将来社会を牽引する博士人材になるために必要なトランスファラブルスキルを修得する機会を提供してまいります。

詳細はWebサイトに掲載しています（https://phdiscover.jp/phd/）。

（大学院教育推進機構）



ポスター発表の様子

ポスター賞受賞者（左より冼麗珊さん（文学院D2）、野口真司さん（総合化学院D1）、小林真也さん（MIRAI D1）、長谷川健司さん（MIRAI D1））

ワークショップの様子

集合写真

文学院が北海学園大学文学研究科と特別聴講学生に関する協定を締結

文学院は、12月21日（水）に、北海学園大学文学研究科と特別聴講学生に関する協定を締結し、調印式を行いました。

調印式は本学で執り行われ、北海学園大学から上野誠治文学研究科長、鈴木英之教授、田中洋也教授ら5名が、本学から藤田　健文学院長、加藤重広教授ら4名が出席しました。

本学では、法学研究科及び経済学院において同種の大学院学生の交流協定を北海学園大学と締結しているところですが、文学院にとっては、本協定が初めての国内大学との単位互換を伴う学生交流協定となります。

今回の協定締結により、双方の大学院の人的資源を活用して、幅広い研究領域にわたる充実した教育が可能となり、調印式では、藤田文学院長及び上野文学研究科長から、協定締結の意義と今後の展望が述べられました。

調印式の後には、両大学院における教育や研究指導の現状等について意見交換が行われ、今後、両大学間のさらなる連携、交流の発展が期待されます。

（文学院）

関係者集合写真

意見交換をする藤田文学院長（右）と上野文学研究科長（左）

理学研究院で消防訓練を実施

理学研究院では、11月28日（月）に消防訓練を実施しました。

当日は、小雨の降る肌寒い天候の中、12時10分地震発生に伴い7号館2階211室から出火した想定で、金川眞行理学・生命科学事務部長を隊長とする事務部で構成された自衛消防隊による通報連絡、非常放送、初期消火、避難誘導、救護等の総合的な訓練を、教職員・学生約50名が参加し実施されました。

訓練終了後には、村越副研究院長から、訓練参加者及び協力者への慰労の辞があり、隊長からは今回の訓練結果を踏まえ、改善すべき事項の確認を行っていきたいとの意思表明がありました。

（理学院・理学研究院・理学部）

初期消火班による消火の様子

消防隊長による各班への指示している様子

生命科学院がアクティブラーニング形式の「Research Ethics Workshop for IGP students（研究倫理ワークショップ）」を開催

12月16日（金）、5回目の“Research Ethics Workshop for IGP students（研究倫理ワークショップ）”を開催致しました。コロナ禍による影響で、2020年、2021年は開催できず、3年ぶりの開催となりました。

このワークショップは、本学オープンエディケーションセンターと大学院教育推進機構高等教育研修センターラーニングサポート部門のご協力のもと、生命科学院が実施する国費外国人留学生の優先配置を行う英語での学位取得を目指す特別プログラム「～北海道と世界の懸け橋～ 生命科学イノベーター養成プログラムTraining Program for Innovators in Life Sciences - Be a Bridge between Hokkaido and the World -」が、プログラム学生を対象として実施致しました。また、先端生命科学研究院・相沢智康教授が講師を務めました。

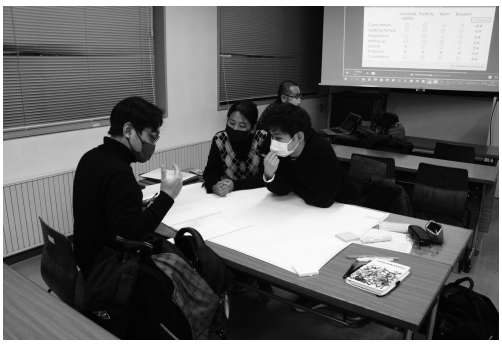
受講登録をした学生は、東京工業大学・眞嶋俊造教授による「研究倫理」講義を事前に動画視聴して得た知識を活用しながら、与えられた研究倫理に関する課題に取り組むという反転学習形式でのアクティブラーニングを行いました。講義は全編英語で実施され、中国・インド・インドネシア・マレーシア・クウェート・タイからの外国人留学生7名、日本人学生4名が3つのグループに分かれることで、ディスカッションが活発に行われました。普段接する機会の少ない様々な研究室の学生が共学することで、知識や考え方を共有するだけでなく、意見を述べる姿勢についても、それぞれの学生が良い刺激を受けたことと思います。

開催にあたりご理解・ご協力いただいた指導教員のみなさま、ご支援いただいた事務担当スタッフのみなさまには深くお礼申し上げます。

（生命科学院）

相沢教授による講義の様子

発表の様子



グループディスカッションの様子１

グループディスカッションの様子２

第17回医学研究院連携研究センター研究成果発表会をオンライン開催

医学研究院では、12月5日（月）に第17回医学研究院連携研究センター研究成果発表会をオンラインにて開催しました。

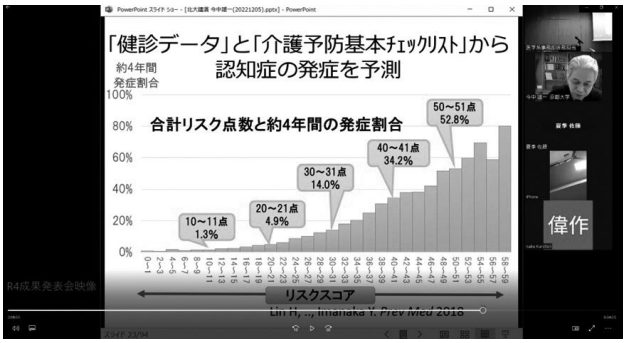
本センターは、長期的展望に基づいて堅実な知を追求する基盤的研究と、目標と期間を設定して先端的・革新的な研究開発を目指す戦略的研究の融合を図ることを目的として、平成18年4月1日に設置された学際的研究拠点です。これまで、大型研究プロジェクトを中心として多彩な研究活動が展開され、医学・生命科学と理工学の融合領域において、世界をリードする数多くの研究成果が得られています。

今回の研究成果発表会では、37名の教職員・学生等の参加があり、センターの各分野から最新の情報が提供され、活発な質疑応答が行われました。

また、特別講演として、京都大学大学院医学研究科　社会健康医学系専攻　教授　今中雄一氏による「医療システムの把握と健康志向の社会づくり」と題した講演を行いました。参加者にとって、今後の取り組みに向けた新たな可能性が示唆された研究成果発表会となりました。

（医学研究院）

講演する医学院博士課程　垂水政人 氏



特別講演演者によるオンライン開催の模様

歯学研究院で「動物供養祭」を挙行

歯学研究院では、11月22日（火）、令和4年度動物供養祭を、新型コロナウイルス感染防止対策を講じながら執り行いました。

本供養祭は、過去1年間に歯学教育・研究のため実験に供された動物（ラット、マウス計1,682体）への感謝と追悼のために毎年実施しており、教職員、学生等の動物実験関係者約30人が参列しました。

最初に網塚憲生歯学研究院長から挨拶があり、次いで動物実験委員会委員長の舩橋　誠教授から、動物実験施設の利用にあたって引き続き新型コロナウイルス感染予防対策を徹底していくことが述べられるとともに、歯学研究の進歩に尊い命を捧げて下さった多数の実験動物の御霊の安らかなることを願う旨の「祭文（さいもん）」が捧げられ、最後に参列者全員により献花が行われました。

（歯学院・歯学研究院・歯学部）

「祭文」を読み上げる舩橋委員長

献花を行う網塚研究院長

工学系部局で安全衛生管理講演会を開催

工学院・工学研究院・工学部、情報科学院・情報科学研究院、量子集積エレクトロニクス研究センターでは、「工学部安全の日※」関連行事として、毎年学内外から講師を招いて、安全衛生管理に係るテーマで講演会を開催しています。

本年度は、11月22日（火）にオンライン会議形式により、AGC株式会社化学品カンパニー環境安全品質部の豊福正典氏を講師に迎え、「AGC化学品カンパニーの技術系人材育成～安全・保安防災教育について～」と題し、入社後の導入教育、特に化学プラントの運転に従事する社員への安全及び保安防災に関する教育について、AGC化学品カンパニーの事例を紹介いただきました。

当日は、多くの学生及び教職員がオンラインで聴講し、講演後には予定時刻を超えて質疑応答がなされ、参加者からは企業の実例を知ることができて有益であった旨の感想が寄せられる等、有意義な講演会となりました。

※工学部安全の日
平成4年8月10日に工学部で発生した重大事故に鑑み、本学部における安全管理・安全教育体制の整備と安全意識の向上に資するために、制定された日。

（工学院・工学研究院・工学部、情報科学院・情報科学研究院、量子集積エレクトロニクス研究センター）

講演する豊福氏

低温科学研究所が金沢大学環日本海域環境研究センターと連携協定を締結

12月19日（月）、低温科学研究所は金沢大学環日本海域環境研究センターと連携協定を締結しました。当協定は、これまで長年にわたり培ってきた研究協力関係を基盤として、より緊密で組織的な連携関係を構築することにより、低温科学及び環境科学分野の研究を発展させることを目的としています。

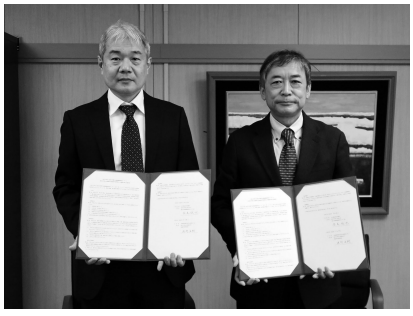
金沢大学環日本海域環境研究センターは、環日本海域から東アジアにおける自然現象と人間活動により生ずる環境問題の解決を目指し、東アジア大陸部から越境輸送される物質の実態把握に最適な観測拠点にて研究を進め、持続可能な環境保全に取り組まれています。平成28年には、文部科学省の共同利用・共同研究拠点に認定され、環日本海域の有害化学物質等の動態把握の研究を展開しています。

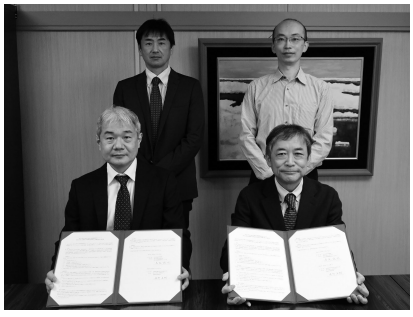
また、これまで低温科学研究所の環オホーツク観測研究センターと連携し、日本周辺縁辺海の自然科学的な役割の解明に関する研究を進めており、今後は環日本海域及び環オホーツク地域における地球科学的研究、地球温暖化や越境汚染等の環境問題、生物多様性の損失等に係る創造的・先駆的な研究拠点形成を協力して推進していきます。

調印式には、金沢大学から長尾誠也環日本海域環境研究センター長、当研究所から渡部直樹所長、山口良文副所長、西岡　純環オホーツク観測研究センター長が出席し、研究交流に向けた意見交換会も実施されました。

今後、双方の研究交流がますます活発に行われることが期待されます。

（低温科学研究所）


調印後の渡部所長（左）と長尾センター長（右）


調印式における関係者集合写真

スラブ・ユーラシア研究センターが冬期国際シンポジウムを開催

12月14日（水）～16日（金）にスラブ・ユーラシア研究センターにおいて、恒例の冬期国際シンポジウムが開催されました。今年のテーマは、「永久凍土：気候変動と資源開発は北極域の生活をどう変えているのか」でした。当センターでは、北極域研究センターなどとともに、文科省の北極域研究加速プロジェクト（ArCS II）を実施しており、今回の国際シンポジウムは、当センターの生存戦略研究プロジェクトに加えて、ArCS IIの社会文化課題「温暖化する北極域から見るエネルギー資源と食に関わる人間の安全保障」と海外交流研究力強化プログラム「地域社会・開発・文化からみた北極と東アジア連鎖」、東北大学東北アジア研究センターが主催しました。

国際シンポジウムは3年ぶりに対面のみで開催され、外国からは、フィンランド、米国、ロシアなどから計11名が参加しました。国内からの参加者を含めると、58名の参加者となりました。懇親会（ホテルマイステイズ札幌アスペン）やエクスカーション（ウポポイ）も予定通り行われ、コロナ禍前の国際シンポジウムに近い形での開催となりました。

ArCS IIでは学際的な研究が行われていることから、普段の当センターの国際シンポジウムとは異なり、自然科学の研究者も多数参加しました。各セッションでは、永久凍土の変化、その上で営まれる先住民（サハ人を含む）の生業その他の経済活動、先住民の文化やアイデンティティ、その持続的発展の可能性などについて議論がなされました。全部で19の報告のうち、10の報告はロシアのサハ共和国に関わる報告となりましたが、これは、これまでArCS IIの社会文化課題で行ってきた北極域研究の多くが同共和国での現地調査に基づいていることを示すものでした。2～3年間、直接会って話をすることができなかったこともあり、対面での議論には大変力が入りました。外国の研究者との間では、今後の研究協力の拡大についての話し合いもなされ、得るところの大きいシンポジウムとなりました。

（スラブ・ユーラシア研究センター）

会場の様子

フロアーからの質問

第2回 北の森林サイエンスCAFE開催

北方生物圏フィールド科学センター森林圏北管理部（名寄市）で、11月24日（木）に、「北の森林（きたのもり）サイエンスCAFE」を開催しました。7月に行なった第1回に引き続き、研究林を含む地域の森林の「木」に焦点を当て、その利用と研究の結びつきを紹介するプログラムを企画しました。

参加者は13名で、一般社会人の方を中心に、行政関係者・北大の大学院生など多彩な顔ぶれでした。スタッフが心をこめて準備したコーヒーを味わった後、ゲストスピーカーである宮地鎮雄さん（東川町・工房宮地 代表）から「森の話　木の話　～家具のふるさと　森の木が家具になるまで～」の演題で講演をしていただきました。宮地さんは、北海道産のクルミ（オニグルミ）を使った椅子づくりで著名な、旭川家具を代表する作家です。材料の調達は、研究林が所在する中川町で行っており、1本1本の立木を大切に、お客様と一緒に山まで入り多数の木の中から、「この木」を使うことを選び、その選んだ木が、丸太を経て板となり家具の部材となるまで紐づけして、極力無駄のないよう製作していく過程を丁寧に紹介していただきました。大量生産では決してできない、自然の恵みを最大限尊重したものづくりの理念がたいへん印象的でした。

続いて、本センターの小林　真准教授からは「土によって変わる木材の色」の話題提供がありました。この研究は、宮地さんの長年の観察を端緒に、上述の中川町での取り組みをきっかけにはじまったとのこと。クルミは、北海道産の広葉樹の中でとくに濃い材色になることが特徴ですが、宮地さんは、その色に生じる大きな個体差の原因に疑問を抱いていました。そこで、小林准教授らの研究グループが、実際に家具となった木が育っていた場所の「土」に注目して研究を行った結果、材色の濃淡は、土壌中のマグネシウム含量と相関関係があったことが紹介されました。質疑応答では、将来的に色の濃いクルミを育てるための方法や、今後の研究の具体的な提案も出され、予定時間をオーバーして議論が盛り上がりました。

7月の第1回は昼時間の開催でしたが、今回は平日のオフタイム（17:30－19:00）に時間を設定しました。日の短い季節にも関わらず、名寄市外から来ていただいた方も複数おられました。今後も、なるべく多くの方々に参加していただけるよう工夫しながら、幅広い研究アウトリーチを地域に届けるよう、この取り組みを継続していきたいと考えています。

（北方生物圏フィールド科学センター）

宮地さんの講演

宮地さんの椅子

コワーキングスペースでのコーヒータイム

小林准教授の講演

苫小牧市と北方生物圏フィールド科学センター苫小牧研究林が包括連携協定を締結

12月20日（火）苫小牧市と苫小牧研究林は学術・教育・文化及び地域の発展に関する各分野の協力関係を深め、双方の発展と充実に寄与することを目的として包括連携協定を締結しました。

当日は苫小牧市役所にて岩倉博文市長と中村誠宏苫小牧研究林長らが出席した締結式が執り行われました。

苫小牧研究林は市街地とのアクセスが良好な立地にあり、樹木園をはじめとした一般開放区域は日頃から市民の方が散策に訪れています。また、苫小牧研究林では参加者が実際に自然の中で活動する体験型の教育サービスに力を入れており、生物調査や林業、山村暮らし、木工などの体験プログラムを通して自然を身近なものとして感じることができるような取り組みを進めています。締結式で中村林長は、「苫小牧研究林の豊かな自然を使った教育サービスのさらなる充実を図り、従来の大学生対象だけでなく、幼稚園、小学校、中学校、高校の児童、生徒、さらに市民へと交流の輪を広げていきたい」と今後の展望を語られました。

（北方生物圏フィールド科学センター）

包括連携協定式に臨む岩倉市長（右）と中村苫小牧研究林長（左）

和歌山研究林でアートプロジェクト「森のちからXIII」を開催

11月14日（月）～12月6日（火）にかけて、北方生物圏フィールド科学センター和歌山研究林においてアートプロジェクト「森のちからXIII・森の聲（こえ）」が開催されました。

本プロジェクトは、アートシーンの第一線で活躍するアーティストを招聘し、森の中での作品制作や地域交流イベントなどの活動を通じ、豊かな自然を蓄えた熊野地方の森の魅力や芸術文化を広く発信する催しです。主催は和歌山市に本拠を置くNPO法人和歌山芸術文化支援協会（waccs）で、本林がメインの会場となってから今年で3度目の開催となります。

今回は東京を拠点に活躍される彫刻家の吉野祥太郎さんを招聘、また2019年に本林で作品を制作された美術家の南条嘉毅さんにもご協力いただき、林内に建つ倉庫・実験用の貯水池・庁舎建物の標本室を使った合計3作品が制作されました。

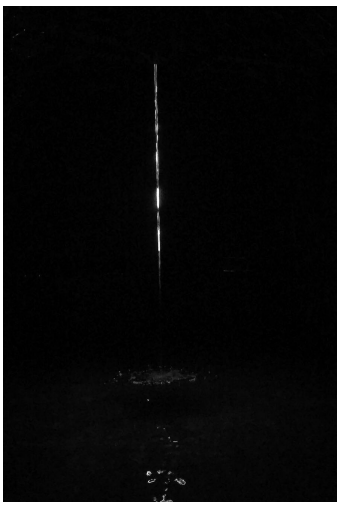
吉野さんが林内にて制作された2作品のうちのひとつ『森の聲』は、風や降雨などにより林道へ転がり落ちてくる石や枝などの自然物から発される何らかの「意志」について、もうひとつの『水に含まれるもの』は、深い森で雨水が濾過されて作られる水源がもつ、人間にとって計り知れない「自然の力」について、それぞれ可視化が試みられました。また南条さんが庁舎建物の標本室にて制作された作品『森の資料室』は、この標本室に常時展示されている木材や種子のサンプル・古道具などから放出される「標本」たらしめる情報（【アフォード（afford）】という言葉が使われています）を、美術の文脈や照明技術などを駆使して、通常と異なる内容へ再編成する試みがなされました。3作品いずれにおいても自然の光や照明装置を使って作品そのものの表情が時間をかけてゆっくりと変化させていく仕掛けがあり、鑑賞者が作品に触れたときには、作品たちの主役である石や枝・水・標本類から発されるメッセージがゆっくりと鑑賞者自身の体の中に染み込んでいく不思議な感覚を覚えることができました。

作品は制作途中の様子から公開され、和歌山県の内外から見学者が多く訪れたほか、作品鑑賞、座談会（アートトーク）、庁舎建物の見学会などを組み合わせたアート・ツアーも11月23日（水・祝）に開催され、終始盛況のうちに幕を閉じました。また本林での教育活動の一環として、複数の学生実習などの場においても個別に作品鑑賞の機会が設けられ、森林資源や生態系サービスの多様な利用について学ぶ場としても活用されました。

（※）本催しで制作された作品は、令和4年12月末までで撤収しています。

（北方生物圏フィールド科学センター）

展示作品『森の聲』



展示作品『水に含まれるもの』

展示作品『森の資料室』

11月23日に開催されたアート・ツアー作品見学の様子

▌博士学位記授与

12月26日（月）に本学大学院研究科等の所定の課程を修了した課程博士は27人、及び本学に学位論文を提出してその審査、試験等に合格した論文博士は6人でした。なお、被授与者の氏名と論文題目等は次のとおりです。

（学務部学務企画課）

課程博士

博士の専攻分野の名称	博士の学位を授与された者 氏名	博士論文名
博士（法学）	川崎（かわさき） まな	出入国管理行政及び入管法における同性カップル－ヨーロッパ人権裁判所の判例を素材として－ 主査：教授　佐々木　雅寿
博士（水産科学）	山谷（やまや） 祥史（よしふみ）	ニンニク含硫化合物による魚油の酸化抑制効果に関する研究 主査：教授　栗原　秀幸
博士（環境科学）	王（ワン） 婷（ティン）	Recreational impacts on unmanaged campsites in Daisetsuzan National Park and suitable management strategy to enhance site sustainability （大雪山国立公園の野営指定地におけるレクリエーションの影響と持続可能性を高めるための適切な管理戦略） 主査：教授　渡邉　悌二
	Shilimkar（シリムカル） Vivek（ヴィヴェック） Kishor（キショール）	The contribution of the Indo-Pacific sea surface height variability to the Indonesian Throughflow under changing climate. （変わりゆく気候系におけるインド太平洋地域の海面高度変動がインドネシア通過流に及ぼす影響） 主査：教授　谷本　陽一
	宮地（みやじ） 友麻（ゆうま）	Separation methods of the internal climate variability and externally forced response, and their applications to the decadal climate variability in the tropical ocean-atmosphere. （外部強制応答と内部気候変動の分離手法とその熱帯大気海洋系における10年周期気候変動への応用） 主査：教授　谷本　陽一
博士（理学）	冨永（とみなが） 隼人（はやと）	Ground state properties of the Kondo lattice model with electron-phonon interaction （電子格子相互作用をもつ近藤格子模型における基底状態の性質） 主査：教授　宮尾　忠宏
博士（農学）	何（カ） 梁棟（リョウトウ）	中国果樹地域における新展開と参入農家の経営確立に関する研究－中国広西省ライチ国有農場を事例に－ 主査：教授　東山　寛
	佐々木（ささき） 純（じゅん）	北海道産ニンニクのウイルス感染に関する疫学的・分子生物学的解析 主査：教授　増田　税
	加川（かがわ） 真二朗（しんじろう）	育種効率化を目指したウシ体外受精卵生産技術に関する研究 主査：准教授　川原　学
博士（生命科学）	Thazhathethil（サザセティル） Shakkeeb（シャキーブ）	Cyclophane-based Supramolecular Mechanophores Using Charge-Transfer Complexes （電荷移動錯体を利用したシクロファン型超分子メカノフォア） 主査：教授　玉置　信之
博士（ソフトマター科学）	穆（ムー） 斉锋（チーフオン）	Study on on-demand functionalization of hydrogel surfaces by force-induced rapid microstructure growth （力誘起急速微細構造成長によるハイドロゲル表面のオンデマンド機能化に関する研究） 主査：教授　龔　剣萍
	RATIH（ラティー） KUSUMASTUTI（クスマストゥティ）	STUDY OF MAMMAGLOBIN 1 AS A REGULATOR IN TRASTUZUMAB RESISTANT CELLS' AGGRESSIVENESS （トラスツズマブ耐性細胞の攻撃性における調節因子としてのマンマグロビン1に関する研究） 主査：教授　芳賀　永

博士の専攻分野の名称	博士の学位を授与された者 氏名	博士論文名
博士（教育学）	土岐（どき） 圭佑（けいすけ）	家庭科におけるシティズンシップ教育実践の枠組みの提案―高等学校における食育の実践事例より― 主査：教授　宮﨑　隆志
博士（保健科学）	向井（むかい） まさみ	診療データの利活用基盤に関する医療情報学的研究 主査：准教授　杉森　博行
博士（工学）	Huang Dai（ファング ダイ）	Study on the effect of upstream water and sediment discharge conditions to the alternate bar dynamics in gravel-bed rivers （上流からの流量と給砂条件が礫床河川の交互砂州動態に与える影響に関する研究） 主査：准教授　岩崎　理樹
	齋藤（さいとう） 俊（しゅん）	微粉化活性炭と遊離塩素を用いた溶解性2価マンガンの除去 主査：教授　松井　佳彦
	成田（なりた） 健太郎（けんたろう）	表流水における農薬の検出可能性の推定 主査：教授　松井　佳彦
博士（理学）	白井（しらい） 孝信（たかのぶ）	Study on the Dome-like Structures with Altered Microenvironment Induced by Basal Extrusion of RasV12-transformed Cells （基底膜側へ逸脱したRasV12変異細胞が形成する微小環境を伴ったドーム様構造の研究） 主査：教授　村上　洋太
	根本（ねもと） 一宏（かずひろ）	Colloidal Synthesis of Coherent InP/ZnS Core/Shell Nanocrystals for Optoelectronic Applications （オプトエレクトロニクス素子創製へ向けた格子整合性InP/ZnSコア・シェルナノ粒子の湿式合成） 主査：教授　村越　敬
博士（医学）	白鳥（しらとり） 里佳（さとか）	抗CD47抗体はエフェロサイトーシスを介してANCA関連血管炎を制御する （CD47 blockade ameliorates ANCA associated vasculitis via the efferocytosis） 主査：教授　清野　研一郎
	千葉（ちば） 雅尋（まさひろ）	CRISPR/Cas9 screeningによって同定されたCD48はPTCL細胞におけるNK細胞免疫監視からの逃避機構に深く関与する （CRISPR screen identifies CD48 as a key molecule for evasion from NK cell surveillance in peripheral T-cell lymphomas） 主査：教授　佐藤　典宏
	吉井（よしい） 啓太（けいた）	Simulation-based assessment of model selection criteria during the application of benchmark dose method to quantal response data （ベンチマークドーズ法の用量反応関係への適用にかかるモデル選択基準に関するシミュレーション研究） 主査：教授　玉腰　暁子
	木井（きい） 修平（しゅうへい）	大腸炎モデルの発症におけるSTAT1を介したLy6c陽性マクロファージの誘導に関する研究 （Studies on the STAT1-mediated induction of Ly6c-expressing macrophages in the onset of an experimental colitis model） 主査：教授　坂本　直哉
	鬼頭（きとう） 健一（けんいち）	高中性脂肪血症合併2型糖尿病におけるペマフィブラートの効果に関する検討－前向き観察研究－ （Effect of pemafibrate on lipid metabolism in patients with type 2 diabetes and hypertriglyceridemia: a multicenter prospective observational study） 主査：教授　伊藤　陽一
博士（獣医学）	近藤（こんどう） 充希（みつき）	Studies on xenobiotic metabolism as a defense system in Carnivora （食肉目動物における生体防御機構としての異物代謝に関する研究） 主査：教授　乙黒　兼一
博士（文学）	龔（キョウ） 金浪（キンロウ）	候孝賢映画研究 主査：教授　応　雄

博士の専攻 分野の名称	博士の学位を授与された者 氏　名	博　士　論　文　名
博士（情報科学）	ふじわら　かずみち 藤原　一道	Whole-genome population analysis of wild house mice (***Mus musculus***): population genetic structure in Eurasia and its surrounding areas and inference of expansion route associated with human activities （野生ハツカネズミ（***Mus musculus***）の全ゲノム集団解析：ユーラシア大陸とその周辺地域における集団遺伝的構造の解明と人間活動に伴った拡散経路の推定） 主査：准教授　長田　直樹

論文博士

博士の専攻 分野の名称	博士の学位を授与された者 氏　名	博　士　論　文　名
博士（環境科学）	タ　バ THAPA バ　ー　バ　ナ BHABANA	Flood risk mitigation by inundation mapping and socioeconomic analyses in two river basins of Nepal （ネパールの2つの河川流域における浸水域予測地図作成と社会経済分析による洪水リスク軽減） 主査：教授　渡邉　悌二
	フィトリ　リズキ Fitri Rizki アマリア Amalia	Development of a Reliable Method to Evaluate Photocatalytic Activity by Colorimetric Analysis without Using Organic Dyes （有機色素を用いない比色法による高信頼性光触媒活性試験法の開発） 主査：教授　ヴァスデヴァンピライ・ビジュ
博士（獣医学）	くわた　ちはる 桑田　千春	Studies on teratogenicity of maternal hypoglycemia in rats and rabbits （ラットとウサギにおける母動物低血糖と催奇形性に関する研究） 主査：教授　木村　和弘
博士（感染症学）	おか　だいすけ 岡　大輔	Studies on the antibacterial activity of a novel fluoroquinolone, OPS-2071, against enteropathogenic bacteria （腸管感染症起因菌に対する新規フルオロキノロン抗菌剤OPS-2071の抗菌活性に関する研究） 主査：教授　鈴木　定彦
	とよまね　こうち 豊間根　耕地	Studies on identification and evaluation of CRISPR diversity on human skin microbiome for development of a new personal identification method （新規個人識別法の開発を目的としたヒト皮膚マイクロバイオームにおけるCRISPRの探索と多様性解析） 主査：教授　東　秀明
博士(文学)	やまぎわ　あきとし 山際　明利	張載關學思想探微—宋明理學における「虚」の思想の研究— 主査：教授　弛　和順

▌研修

令和４年度北海道地区国立大学法人等学生支援担当職員SD研修

開 催 日：令和4年12月20日（火）

開催方式：Web会議システム　Cisco Webex

研修目的：学生指導、学生支援及び学生サービス業務を円滑かつ適正に処理するために必要な基本的知識、対応能力等を習得することにより、学生支援担当職員としての能力の向上を図ることを目的とする。

主催部局：学務部学生支援課

文学研究院　瀬名波 栄潤教授による講演の様子

▌表敬訪問

海外

年月日	来　訪　者	来 訪 目 的
4.12.15	在札幌アメリカ合衆国総領事館　Mark Wuebbels 総領事	今後の交流に関する懇談

Mark Wuebbels 在札幌アメリカ合衆国総領事館総領事（中央左）

（国際部国際連携課）

▌人事

令和4年12月15日付発令

新　職　名（発令事項）	氏　　名	旧　職　名（現職名）
【部局長】 大学院法学研究科長 法学部長 （期間：令和6年12月14日まで）	尾　崎　一　郎	大学院法学研究科附属高等法政教育研究センター教授
【副研究科長】 大学院法学研究科副研究科長 （期間：令和6年12月14日まで）	佐々木　雅　寿	大学院法学研究科教授
【教育研究評議会評議員】 （期間：令和6年12月14日まで）	佐々木　雅　寿	大学院法学研究科教授

令和5年1月1日付発令

新　職　名（発令事項）	氏　　名	旧　職　名（現職名）
【教授】		
大学院歯学研究院教授	城　戸　幹　太	（採用）
大学院情報科学研究院教授	小　川　貴　弘	大学院情報科学研究院准教授
大学院情報科学研究院教授	小　林　孝　一	大学院情報科学研究院准教授

新任部局長等紹介

令和4年12月15日付

法学研究科長・法学部長に

尾崎（おざき）　一郎（いちろう）　教授

令和4年12月14日限りで小名木明宏法学研究科長・法学部長が任期満了となり、その後任として尾崎一郎教授が発令されました。

任期は、令和6年12月14日までです。

略　歴

生　年　月　日　昭和41年6月19日
平成元年 3月　東京大学法学部卒業
平成 3年 3月　東京大学大学院法学政治学研究科基礎法学専攻修士課程修了
平成 3年 4月　東京大学大学院法学政治学研究科助手
平成 6年 9月　北海道大学法学部助教授
平成12年 4月　北海道大学大学院法学研究科助教授
平成17年 4月　北海道大学大学院法学研究科附属高等法政教育研究センター助教授
平成18年 4月　北海道大学大学院法学研究科附属高等法政教育研究センター教授
平成27年 4月～平成31年 3月　北海道大学大学院法学研究科附属高等法政教育研究センター長
令和 2年12月～令和 4年12月　北海道大学大学院法学研究科副研究科長
令和 4年12月～　北海道大学教育研究評議会評議員

新任教授紹介

令和5年1月1日付

歯学研究院教授に

城戸（きど） 幹太（かんた） 氏

口腔医学部門口腔病態学分野
歯科麻酔学教室

最終学歴
東北大学大学院歯学研究科博士課程修了（平成11年3月）
博士（歯学）（東北大学）
専門分野
歯科麻酔学

情報科学研究院教授に

小川（おがわ） 貴弘（たかひろ） 氏

メディアネットワーク部門
情報メディア学分野

生年月日
昭和55年12月21日
最終学歴
北海道大学大学院情報科学研究科博士後期課程修了（平成19年9月）
博士（情報科学）（北海道大学）
専門分野
マルチメディア信号処理、人工知能

情報科学研究院教授に

小林（こばやし） 孝一（こういち） 氏

システム情報科学部門
システム創成学分野

生年月日
昭和50年7月21日
最終学歴
東京工業大学大学院情報理工学研究科博士後期課程修了（平成19年3月）
博士（工学）（東京工業大学）
専門分野
システム制御理論、サイバーフィジカルシステム

▌訃報

名誉教授　飯田（いいだ）　誠一（せいいち）　氏
（享年87歳）

名誉教授　飯田誠一　先生が令和4年12月12日にご逝去されました。

飯田先生は昭和10年北海道に生まれ、同33年北海道大学工学部機械工学科を卒業、同35年同大学院博士課程を退学後、北海道大学工学部講師に着任、同36年助教授、同58年教授に任じられました。平成11年に定年退職後は、北海道工業試験場特別相談員を務められました。

学内においては、国際交流委員会専門委員、点検評価委員会専門委員、文部省在外研究員候補者選考委員会委員として本学の主に国際交流分野で貢献されております。

学外においては、日本機械学会において理事、評議員、北海道支部長などの役職を歴任して機械工学分野（主に流体工学）の発展に大いに寄与するとともに、テクノポリス函館開発計画検討協議会委員、文部省学術審議会（科学研究費分科会）専門委員、(財)宇宙環境利用推進センター研究推進委員会委員、北海道クリーンエネルギーアドバイザーなどを歴任して地域の発展に大いに貢献されております。

飯田先生は、層流境界層の解析及び流体機械の性能に関する研究、よどみ点流れの安定性及び圧縮性流体の流れに関する研究、熱流体のカオス的挙動に関する研究を行い、これらの分野の研究発展に多大な貢献をされております。その中でもコンピュータの黎明期より流れの数値解析手法の研究を続けられ、層流境界層の数値解法としては最も高速な手法の一つとして知られる独自の高収束解法を確立し、層流剥離の予測と制御の分野に多大な貢献をされております。この業績は“Encyclopedia Fluid Mechanics”に収録され世界的にも認められております。

ここに謹んで飯田先生の学術研究の発展、人材育成への貢献に感謝し、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

（工学院・工学研究院・工学部）

編集メモ

●大学入学共通テストが1月14日（土）、15日（日）の2日間にわたって行われました。本学試験会場における設営やテスト当日の様子は、関係者の皆様の協力を得て、テレビ等で報道されています。報道を見て、これから実施する本学の一般選抜に思いを馳せた北大人も多かったのではないでしょうか。全学一丸となって、入試シーズンを乗り切っていきたいですね。

高等教育推進機構での設営の様子

テスト当日に高等教育推進機構へ入場していく受験生の様子

裏表紙メモ

今月のキャンパス風景は天塩研究林です。二酸化炭素吸収量を測定するフラックスタワーから見下ろすと、地上では寒さを物ともせず作業を続ける職員の姿が。天塩研究林では、教育・研究だけではなく、木を素早く、正確に切り倒す技術も継承されてきました。ここで伐採した木は、地元幌延町で造られるジンやワインの熟成樽にもなるそう。地域との連携を粘り強く続けてきた、天塩研究林の努力が窺えます。

キャンパス風景 34

北方生物圏フィールド科学センター森林圏ステーション
北管理部天塩研究林（天塩郡幌延町字問寒別131）

北大時報①　No.826　　令和5年1月発行

北海道大学社会共創部広報課　〒060－0808 札幌市北区北8条西5丁目
TEL：（011）706－2610 ／ FAX：（011）706－2092 ／ E-mail : kouhou@jimu.hokudai.ac.jp
https://www.hokudai.ac.jp/pr/publications/jihou.html